

制御焦点と上方比較後の感情・動機づけ・パフォーマンスとの関連

—同化と対比に着目して—

三和秀平¹ 外山美樹² 長峯聖人³ 湯立⁴ 相川充⁵

^{1,2,3,4,5} 教育テスト研究センター ^{1,3,4} 筑波大学人間総合科学研究科

^{2,5} 筑波大学人間系

大学生 85 名を対象に、上方比較後の感情・動機づけ・パフォーマンスとの関連について、制御焦点と同化および対比に着目して検討した。その結果、上方比較をした際、促進焦点の個人は同化が生じた場合に、防止焦点の個人は対比が生じた場合に、それぞれ高い動機づけまたはパフォーマンスへつながることが示された。促進焦点の個人は、同化が生じた際の比較相手がポジティブな役割モデルになったため、動機づけやパフォーマンスが向上したことが考えられる。一方で、防止焦点の個人は、対比が生じた際に比較相手との差を過大視し、自己の点数の低さに着目したため、失敗を回避するためにパフォーマンスが向上したことが考えられる。

キーワード：制御焦点，上方比較，感情，動機づけ，パフォーマンス

1. 問題と目的

Higgins (1997) の制御焦点理論では、人の持つ目標志向性を促進焦点と防止焦点に区別している。促進焦点は、利得の存在へ接近、利得の不在の回避を目指す目標志向性である。一方で、防止焦点は、損失の存在の回避、損失の不在への接近を目指す目標志向性である。上記のような制御焦点に関する研究は、近年様々な文脈で検討が行われている。それらの諸研究の中には、他者との比較に関する研究もある。例えば、Lockwood, Jordan, & Kunda (2002) は、促進焦点の強い個人は、成功を収めているなどのポジティブな役割モデルに、他方、防止焦点の強い個人は不幸を経験しているなどのネガティブな役割モデルに、それぞれ動機づけられることを示した。しかし、他者との関係に関わるプロセスは複雑であり単純に説明できない部分もある。例えば、上方比較時に同化が起こると自尊心の高揚や鼓舞や憧憬などの感情がもたらされる。一方で、対比が起こると自尊心の低下や恥、憤慨などのネガティブな感情がもたらされると言われている (e.g. 高田, 2011)。

感情と制御焦点について、尾崎 (2011) は、促進焦点は喜び—落胆の感情が、防止焦点は安心—不安の感情が動機づけを媒介すると考えられると述べており、比較後に喚起される感情によって、促進焦点、防止焦点それぞれの機能が異なることが考えられる。

上記の点を考慮して、本研究では制御焦点と上方比較の関連について、同化と対比といった比較の過程に着目して検討を行う。同化が生じると、比較相手がポジティブな役割モデルとなること、鼓舞などのポジティブな感情が喚起されることから促進焦点の個人が、一方で、対比が生じると、相手との違いを過大視するため自分の失敗に着目してしまうこと、恥などのネガティブな感情が喚起されることから、防止焦点の個人が、それぞれ動機づけられ、パフォーマンスが向上することが考えられる。

2. 方法

2. 1 実験参加者

関東地方の大学生 85 名（男性 40 名，女性 45 名），平均年齢は 20.26 歳（ $SD=1.96$ ）。

2. 2 実験課題

点つなぎ課題を使用した。この課題は，数字の順番に点をつないで形を完成させる課題である。1 回の試行で 4 題あり，30 秒の制限時間を設け，制限時間内にできるだけ正確に，できるだけ速く点をつなぐように教示した。制限時間内につなぐことのできた最終到達点を“パフォーマンス”とした。

2. 3 使用尺度

制御焦点の測定には，学業領域における制御焦点尺度（外山・長峯・湯・三和・相川，2016）に関して 7 件法で回答を求めた。比較後の感情の測定には，社会的比較感情尺度（外山，2006）に関して 5 件法で回答を求めた。内発的動機づけの測定には，独自に作成した 5 項目（e.g. この課題はおもしろいと思う）に関して 5 件法で回答を求めた。

2. 4 条件の操作

実験参加者を同化条件と対比条件に分類するために性格プロフィールを比べることで，類似度の操作を行った。性格プロフィールについては，TIPI-J（小塩・阿部・カトローニ，2012）の項目を使用し，各項目に当てはまるかを○，×で評定を求めた。そして，1 回目の点つなぎ課題終了後に，性格特性に関する課題として，他の実験参加者（以下 A さん）の性格プロフィールの回答を提示し，性格の比較を求めた。

同化条件では，A さんの性格プロフィールとして，実験参加者と性別が一致し，性格プロフィールが 80% 一致した回答を提示して“A さんとの類似点”の記述を求めた。対比条件では，A さんの性格プロフィールとして，性別が不一致で，性格プロフィールが実験参加者の回答と 20% 一致した回答を提示して“自分はどのような性格か”の記述を求めた。

2. 5 実験手続き

- A) TIPI-J の回答を求め実験参加者の性格プロフィールを作成した。
- B) 学業領域における制御焦点尺度の回答を求めた。回答を行っている間に，実験者は A さんのプロフィールを作成した。
- C) 実験課題（1 回目）を実施した。
- D) 条件の操作を行った。その際に，実験者は課題を採点し，得点を算出した。
- E) 実験参加者の得点をフィードバックするとともに，A さんの得点として実験参加者の得点+9 点（予備実験における 1 標準偏差）の得点を提示した。これにより，実験参加者に上方比較を行わせた。
- F) 社会的比較感情尺度，内発的動機づけの回答を求めた。
- G) 5 分間の休憩の後に，実験課題（2 回目）を実施した。

3. 結果と考察

3. 1 制御焦点の群分け

学業領域における制御焦点尺度の促進焦点と防止焦点の差の中央値を算出した（ $Me=0.57$ ）。差がこの値よりも大きい群を促進焦点群（ $M=1.35, SD=0.67$ ），小さい群を防止焦点群（ $M=-0.25, SD=0.59$ ）とした。両群の差の平均には，有意な差および大きな効果量が認められた（ $t(83)=11.74, p<.01, d=2.55$ ）。

3. 2 二要因分散分析の結果

各変数の得点に差があるのかを検討するために，各変数の得点を従属変数，制御焦点（促進焦点 / 防止焦点）および条件（同化 / 対比）を独立変数とする二要因分散分析を行った（Table 1）。その結果，社会的比較感情に関しては，有意な主効果および交互作用はみられなかった。内発的動機づけに関しては，交互作用が有意であった。単純主効果の検定を行

った結果、同化条件において促進焦点の方が防止焦点よりも高いこと ($F(1, 81)=9.58, p < .01, \eta_p^2=.11$) が示された。また、促進焦点において同化条件の方が対比条件よりも高い傾向にあること ($F(1, 81) = 3.37, p < .10, \eta_p^2=.04$) が示された。

パフォーマンスに関しては点つなぎ課題 (2 回目) の得点を使用した。分析の際には点つなぎ課題 (1 回目) の得点を共変量として投入した。その結果、交互作用が有意であった。単純主効果の検定を行った結果、同化条件において促進焦点の方が防止焦点よりも高いこと ($F(1, 81)=10.63, p < .01, \eta_p^2=.12$) が示された。また、防止焦点において対比条件の方が同化条件よりも高いこと ($F(1, 81)=5.73, p < .05, \eta_p^2=.07$) が示された。

3. 3 総合考察

同化が生じた際には、他者の成功に着目したため、比較相手の高い得点がポジティブな役割モデルとなり、促進焦点の個人は動機づけが高くなったと考えられる。一方で、対比が生じたときは比較相手との違いを過大視し、自分の得点の低さに着目したため、防止焦点の個人は低い得点を回避するために、比較後のパフォーマンスが向上したと考えられる。

感情に関しては有意な違いはみられなかったため、今後は感情との関連についても更なる検討が必要であろう。

Table 1 制御焦点×条件の二要因分散分析の結果

	平均値(標準偏差)				F値および効果量						
	促進焦点		予防焦点		主効果				交互作用		
	同化	対比	同化	対比	制御焦点	η_p^2	条件	η_p^2	制御焦点×条件	η_p^2	
憤慨 ($\alpha=.89$)	1.31 (0.69)	1.37 (0.58)	1.38 (0.55)	1.34 (0.57)	0.02	.00	0.01	.00	0.17	.00	
卑下 ($\alpha=.89$)	2.03 (0.96)	1.96 (1.16)	2.08 (1.07)	2.07 (0.93)	0.13	.00	0.02	.00	0.02	.00	
憧憬 ($\alpha=.78$)	2.32 (0.72)	2.24 (0.96)	2.45 (1.09)	2.44 (0.88)	0.72	.01	0.05	.00	0.03	.00	
意欲 ($\alpha=.87$)	2.92 (1.14)	2.88 (1.25)	2.74 (1.07)	3.02 (1.03)	0.01	.00	0.25	.00	0.44	.01	
内発的動機づけ ($\alpha=.85$)	4.60 (0.69)	4.14 (0.96)	3.82 (0.86)	4.22 (0.74)	3.96 *	.05	0.03	.00	5.83 *	.07	
パフォーマンス ($\alpha=.90$)	58.49 (9.92)	54.46 (10.55)	55.35 (6.94)	58.43 (11.11)	4.50 *	.05	0.81	.10	6.25 *	.07	

注1) * $p < .05$

注2) パフォーマンスは共変量に1回目の得点を投入した。

参考文献

Higgins, E. T. (1997) Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52: 1280-1300

Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002) Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83: 854-864

小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012) 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21: 40-52

尾崎由佳 (2011) 制御焦点と感情—促進焦点と防止焦点にかかわる感情の適応的機能— 感情心理学研究, 18: 125-134

高田利武 (2011) 新版 他者と比べる自分—社会的比較の心理学— サイエンス社

外山美樹 (2006) 社会的比較感情尺度および社会的比較対処行動尺度の作成 日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集, 34

外山美樹・長峯聖人・湯立・三和秀平・相川充 (2016) 学業領域における制御焦点尺度の作成ならびに信頼性・妥当性の検討 筑波大学心理学研究, 52: 19-24